

順正寺報第二十二号

『彼岸会』御案内

当山「順正寺」では、壇信徒の総霊位をまつり、仏恩報謝の念いをこめて、左記の通り「春季彼岸会法要」を厳修致します。

公私共御多忙とは存じますが、万障繰合せの上御参詣下さいます様、お願い致します。

記

二月二十四日（金）

「結願の日」

午後一時より

法説経 法話 おおとぎ

以上

◎御自宅で読経を御希望の方はお電話下さい。

彼岸入り 三月 十八日（土）

お中日 三月 二十一日（火）春分の日

結願 三月二十四日（金）

◎寺へ御遺骨をお預けの方は、お彼岸の期間中に必ずお参り下さい。

尚、十九日（日）・二十一日（春分の日）にお参り頂ければ、読経供養致します。 住職

◆『彼岸』の意義について。

「彼岸」とは、日本固有の風習であります。この風習は、古来より伝わり、今日まで生き続けてきたものであり、本来は「至彼岸」のこと、つまり、「彼岸に至る」ことを言います。ここでいう「彼岸」とは、極楽浄土・彌陀世界のことであり、そこまで辿り着くことをいうわけです。ただし、そこまでは、難渡海（渡り難き海）があり、自力にて辿り着けるものではなく、その海を越え、全ての者を岸まで導くのが「彌陀の本願」なのです。例えば、「彌陀の本願」とは、「難渡海を渡る大船」といえるものです。ゆえに、彼岸とは亡き人の徳をしのびつつ、その誘いにより「彼岸」を慕い、彌陀の大船に乗じて救われていかんと発心する場であります。「彼岸」に至るまで、末法濁世に生きる我々には多くの苦しみがあります。その世の中で生をまっとうしていくことを願っているのが、仏様であり、阿彌陀様であります。そこに、真に気付いていく機会として、「彼岸」という一つの風習が今日まで根付いてきたのであります。

まり子ちゃん の 二二回 己心

坊守 江口 久子

まり子ちゃんは生れ乍ら大きな障害を持った少女でした。ご両親と一人のお兄ちゃんの愛情を一心に受けて育てられました。しかし、悲しいことに、お父様が亡くなられました。その御縁で初めて、まり子ちゃんとの出会いが始まりました。まり子ちゃんの病気はダウン症でした。彼女は読書が大変好きで、沢山の本を読んでいたとのことでした。いつもお母様と手を繋いではお寺にもきてくれました。

或る春のお彼岸の時です。丁度、春一番のような強い風の日、『学校の帰り、どうしてもパパに会いに行く、お寺の小母チャマに会いに行くと言って。まり子に引かれて参りました』と、お詣りに来てくれました。お焼香が済み、向き合ってお話をしたりして、さて、お家に帰る時、私が、本当に良く来てくださったと、『これはお家に帰って、お兄サンとママと三人で召し上がれ』と、本堂にあった果物を差し上げた時です。突然彼女は私に向

かって合掌し『まり子、幸せ！』と、言ったのです。私はその姿を見て、ビックリしました。と、同時に涙が溢れ、『まり子ちゃん、小母さんは、貴女の前にいるのが恥かしい！』と、申したのです。なんの汚れもない彼女、誰が教えたわけでもないとお母様に言われ、彼女のその姿を前にして、まるで仏さまの化身のように思えたのです。お寺の年中行事の折には、体調さえ良ければ、お母様と必ず詣って、チョココンと座って、ご法話を静かに聴聞し、気が付くといつの間にか姿が見えず、静かに席を立ていかれてました。

二年前の事です。外出して戻ると、まり子ちゃんのお兄さんが亡くなられたと連絡が入ったと言うので、まさかと思いつつ住職が電話を入れました。パパに変わって一家の柱となって頑張っていた、彼女の最愛のお兄ちゃんが亡くなってしまうのです。確か、当寺の副住職と同年齢。『どうして！』と思うと同時に、『まり子ちゃんは！』と、心に浮かびました。お電話で、『大丈夫です』とお母

様に伺い、そして、お兄さんのお通夜に住職が行き、戻って参りました折り、彼女の様子を問いましたところ、お経中は別室にて眠っていた様子と聞き安心しました。

翌朝、お母様より電話が入りました。

『奥様、まり子が、昨夜、亡くなりました』と、聞かされ、瞬間、『ウソでしょう！』と、言っていました。しかし、その直後「アッ！お兄さんがまり子ちゃんと一緒に浄土へ、パパの処へ連れていかれたのだ。お母さん一人で：と、これから先のことを案じて二人で旅だったんだ！」と、心に浮かびました。あんなに妹を憶い、パパ変わりを勤めたお兄ちゃんが、彼女の手を引いて、お浄土へ仲良く往ったと思えません。

お兄さんのお葬儀の晩がまり子ちゃんのお通夜でした。流石に住職も精神的に参ったのか、副住職が伺うこととなり、私も一緒に連れていっていただきました。一度に、二人のお子を送らなくてはならないお母様の小さくなった姿を見て、言葉もなく、そんな中で、沢

山の友人知人の方々に詣っていただいでいる様子を見て、お兄さん、まり子ちゃん、そしてお母様のお人柄が伺えたように思えました。

あれから早いもので、三回忌のご法事がつい先日お寺で勤まり、改めて、お兄さんとまり子ちゃんを思い、忘れ得ぬ懐かしい人となりました。次男の事を『一休さんのお兄さん』と言って、親しみを持ってくれていたようので、次男も来て下さった折りには、玄関より手を取って、ご本堂へ招き入れていたようです。

享年二十五才となってられたのですが、生前中の彼女は本当に童女のごとく、汚れを知らない乙女でした。

彼女はお兄さんの死を知らされた朝、スーと席を立ち、本棚より『無情』という一冊の本を出してきて、只、ひたすら読んでいたという事。何か不思議な念が致します。

ご法事の当日、お仏華の奥から、あの、はづかしそうに両手を膝の前に組んで、はにかんでいた、まり子ちゃんが、あの笑顔が見えるようでした。

「一緒に一緒にいたしませんか！」

親鸞聖人東海のご旧跡と

箱根路の旅の御案内

主催・順正寺

協賛・白色白光会

日時・平成七年五月十七日(水)

大型バスで日帰り旅行

定員・四十名

参加費

一人、金、一万八千五百五十円

(昼食代、その他の諸経費を含む)

尚、参加人数によって多少の変動があります。

過去、白光会では年に一回の旅を三回企画し、その旅を通して、何時も楽しく、皆様と共に思い出を作って参りました。

今年も又、新緑の箱根の山々を眺め、親鸞聖人の足跡を尋ね行く旅を企画しました。

山のホテルでの昼食。そして何よりも、無理のないスケジュールを組みました。是非、お誘い合わせの上、お一人でも多く参加下されることを願っております。

申し込みはお電話で構いません。順正寺まで御一報ください。

申し込み締め切りは、

四月二十日迄とさせていただきます。以上

最近、妙にいらついでいる。何でもない事
がやたらと引掛かっている。これでは一寸
ないと思うのだが、何が悪くない一言、思
した態度(相手の態度が悪いと言わないか
く、自分の捕らえ方が悪いからか)と思
えない)直ぐにカチンと来るのだ。これじゃ余
りにも自分が情けないと思ひ必死に良い人
演じようとしていた。しかし、このいらつき、
怒りとこの感情だけはどうにも仕様がなく、
堂々と前になんなか解ればまだ救いもある
の原因がなんの生活とこれからの生活に因
かもしれない今の生活とこれからの生活に因
立つ不安から生じているところから、何等か
の不安から生じているところから、何等か
があれば未だしも、それすら思付かない。
自分自身の感情すらどうすることもできない
自分がいる。感情すらどうすることもできない
それがもたらさしようともがいている自
分がいつもいる。幾重にも縛られて行く。了

☎177 東京都練馬区石神井町3の17の4

電話 03(3996)2064

FAX 03(3997)8117

順正寺